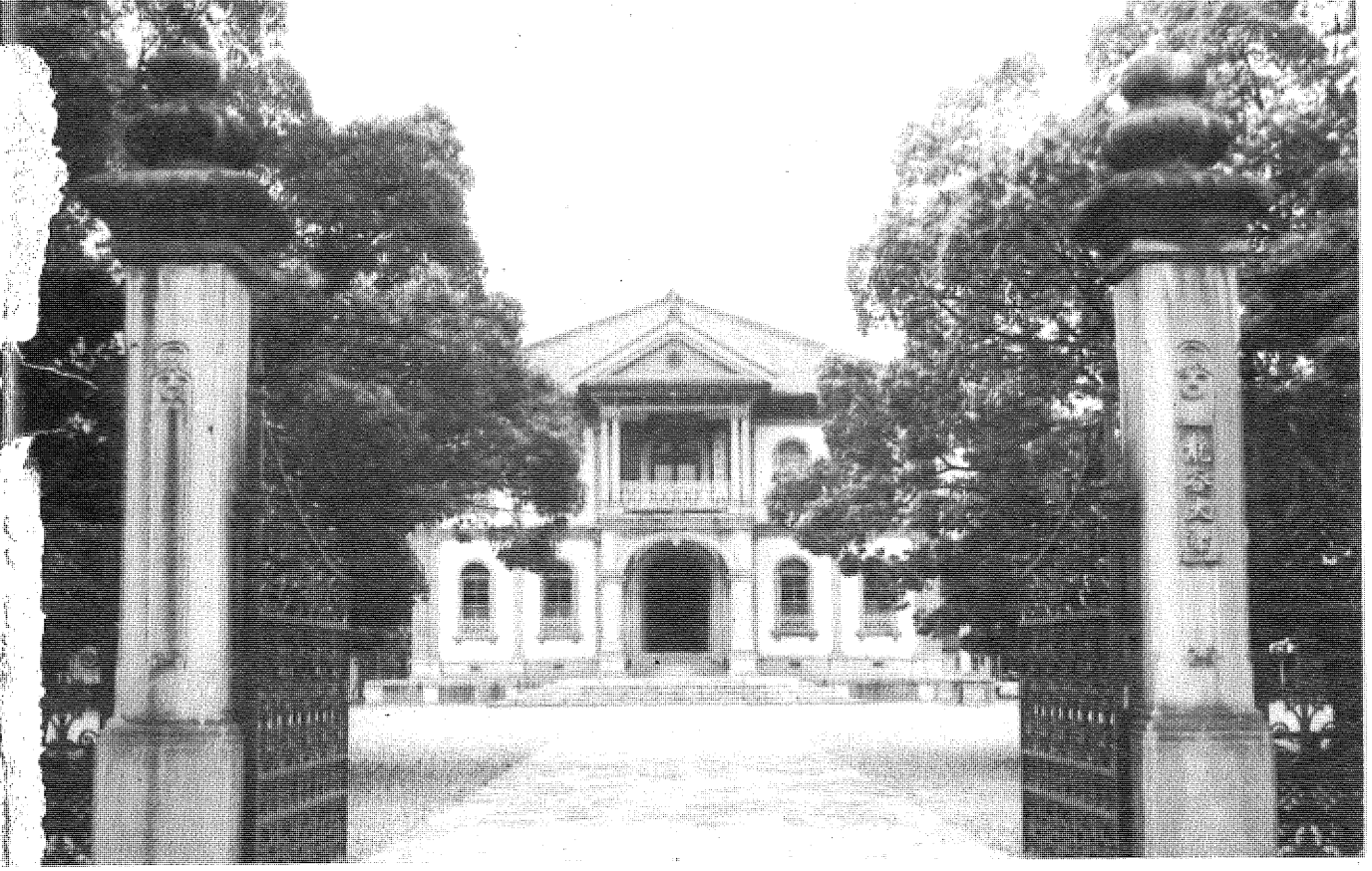
翔奏

—創部15周年記念誌—

龍谷大学学友会学術文化局吹奏楽部
龍谷大学吹奏楽部OB会



龍谷大学学歌

一、永久に揺がぬ　みのり聞き
寄する思想の　波しずめ
久遠の光　まどかなる
真理の大樹　栄ゆけば
見よ黎明の　空澄みて
吾等が学府　光輝あれ

二、仰げば高き　雪山の
姿をうつす御教に
おもいをはせて　たゆみなく
心をみがく　幾千の
同信の友　相集う
吾等が学府　光輝あれ

三、世運の流れ　遷るとも
正法萬古　変りなし
公孫樹の蔭に　法幢を
真心こめて　守りゆく
若き学徒の　相集う
吾等が学府　光輝あれ

１５周年記念に寄せて

京都府大学吹奏楽連盟
理事長　**仁井田　邦　夫**

創立１５周年を迎え心からお喜び申し上げます。今日までの業績に対し、諸先輩の方々は大変ご苦労さまでした。戦後、大学吹奏楽の発足と発展は応援団所属によって時代を流れ、色々な遍歴を経て今日あると思います。龍谷大学に於ても応援団吹奏楽部が一時期廃部になり、吹奏楽研究会という形から再出発した事を記憶しております。日頃は役員を通じ、四年前のドイツ遠征を通じ多くの卒業生に接して来ました。生真面目な人、ユニークな人様々でした。おそらく今は立派な社会人となり、大半が一子、二子の親父になっている事でしょう、懐しく想像しております。さて、今日の学生達は自己中心的になったり、他からの指導批判に対し、畏縮的反発心を起したり、自分の殻の中に閉じこもり活動力を伴わないで三無、四無主義という代名詞で呼ばれていますが、これは将来に対する警句です。人間という動物はとことん落ちてみないと自覚しないのかも知れませんが、学生自身がやってみようという気になりさえすれば、この吹奏楽団という組織を活用し、若さと集団の力を発揮し、視野の広い豊かな人間性を得ることが出来るのです。諸先輩が築き上げた数々の伝統を後輩達が受け継ぎ益々発展することを祈念しております。

吹奏楽部創部15周年を祝す

学生部長　小　田　義　久

吹奏楽部がこのたび創部15周年を迎えられたこと、心よりおよろこび申し上げます。私が学生部の仕事にたずさわるようになってから、降誕会をはじめとする数々の大学の公式行事に参加させていただく機会にめぐまれたわけですが、その時、行事の先頭をきって進む吹奏楽部の演奏に感激する場面が多くありました。雨の日も、木枯の吹く寒い日でも、一糸みだれず華麗な演奏をくりひろげられる部員たちの姿に大変有難く思った次第です。

私が吹奏楽部を身近に感じるようになったのは、私のゼミに２名の部員がいたことです。この二人は受講態度が大変よく、立派な卒論を書きあげるとともに、公務員試験にも合格して二人とも就職したのであります。この二人は、課外活動と正課とをみごとに両立させ、充実した学生生活を送ったところに感心させられたわけであります。以来、私は吹奏楽部の活動に注目するようになったのであります。

部員にあっては、先輩が築いてこられた15年の伝統を守り、今後ますます充実した活動をされんことを心より念じてお祝いの言葉といたします。

吹奏楽部の思い出

吹奏楽部顧問

経済学部教授　岸　田　　理

龍谷大学に吹奏楽部が再建されて、もう１５年になると言う。まるで昨日のことのようである。今後の記録のため、思い出すまま特徴的な出来事を以下に記しておこう。

現在の吹奏楽部の前身は、実に龍大にかつて存在した応援団に所属していたものである。

ところが、昭和４３年春、その応援団は、強制勧誘をめぐって生じた不祥事件のため、やむなく解散させられた。したがって、旧吹奏楽部も自然的に消滅することとなったのである。

僕が現在の吹奏楽部に関係するようになったのは、その後からのことである。確か学園紛争が始まる前であったと思うが（昭和４５年春）、中尾勇哲君が突然やって来て、「旧吹奏楽部を新たな同好会として再発させたいので、顧問になって欲しい」と言う。僕がそれ以前に学生部長を勤めていた関係もあって、おそらく当時の学生課がそれを指示したのであろう。というのは、学生課では、一方では吹奏楽愛好の士の再建への情熱を理解しながらも、他方ではその同好会結成が応援団の再建につながりはしないか、と恐れたからであろう。諸般の事情を考慮して、ともかく僕は顧問を引き受けることにした。

それから間もなく、イギリス留学のためロンドンに向けて出発したが、その後一年間、吹奏楽同好会のメンバーは幾多の困難な状況のなかで再建に努めたようである。現在、ＯＢ会の会長をしている川島謙一君から、その当時の苦労話を後になって聞かされたものである。

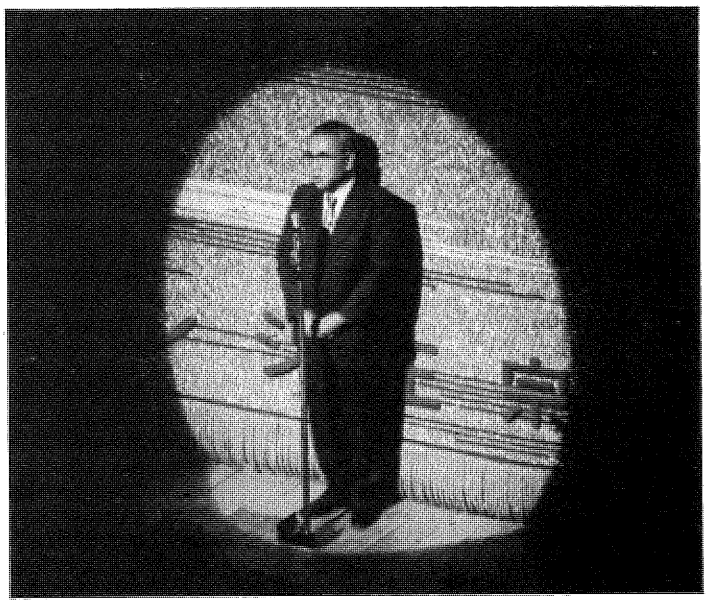
その後は、伊藤真君などが中心となって、今日の発展への基礎づくりが行われ、中井一裕君が幹事長の時に、初めて学外で定期演奏会が持たれた（昭和４９年１２月）。いまだ正式のクラブになり得ないまま、第一回定演を府立勤労会館でヤリ遂げたことは、吹奏楽部の歴史のなかで一つの画期的な出来事であった、と言えよう。

その後は比較的順調に事が運び（クラブ昇格をも含めて）、吹奏楽部も着実に力をつけ、大西敏徳君が幹事長の時、遂に京都府吹奏楽コンクールに出場することができ

た（昭和５３年）。それ以来、出場回数を重ねながら、ほとんど金賞を取りつづけてきたことは、誠に立派と言わねばならない。

以上のような活躍を通じて、ＯＢも徐々に増え、今では強力なＯＢ会が結成されて現役のメンバーを直接・間接に支援している状況である。誠に喜ばしい限りである。

過ぎ去った日々はいかにも短い。しかし、吹奏楽部にまつわる思い出はつきない。紙面の都合上、いちいち名を挙げ得なかったが、吹奏楽にいっときの青春と情熱をかけた、あの顔・この顔がはっきりと思い出される。このような先輩がいたからこそ、今日の吹奏楽部が成り立っているのである。現役諸君の今後の務めは、これらの先輩のエネルギーを正しく継承し、それを発展させることである。そして、いつの日か、関西学生吹奏楽界はおろか、全国のそれに躍り出て、天下にわが龍谷大学吹奏楽部の名を轟かせることである。夢と希望のないところに、真の向上はあり得ない。いっそうの精進を祈るや切である。



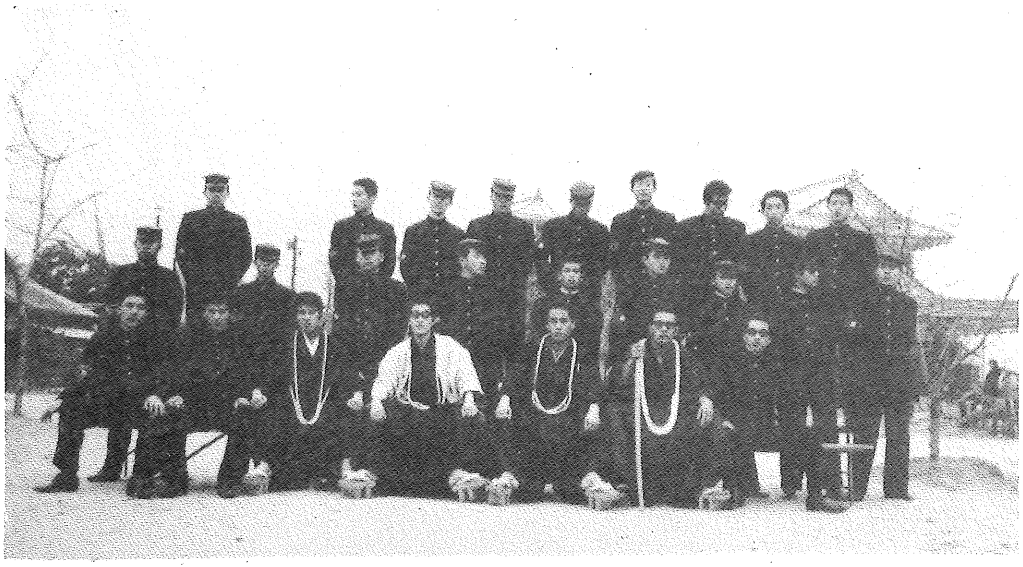
（演奏会にて）

吹奏楽部不屈の精神

ＯＢ会会長　川　島　謙　一

人の記憶は案外不確実なものである。ましてそれが１５年も以前の事になると、部分的に強く脳に印象されている“点”としての記憶はともかく、その前後を引っぱり出し、“線”として組立てようとすると、とたんに説明が難しくなってしまうものであります。

この度、吹奏楽部部長（顧問）・岸田先生の発案により、１５年誌が企画されたことは、ＯＢ諸兄の部分的な記憶を一本の線として編集し、吹奏楽部の歴史を正確に伝承するものとして、また、多くの卒部生が口を揃えて言うであろう、“青春の思い出”を集積するものとしても意義深いものといえるのではないだろうか。



昭和４３年春の合宿（松山城にて）
右後方無帽が旧吹奏楽部員

草創の頃

昭和４２年４月、龍谷大学応援団（正確には応援総部と称し、タテマエとしては中執が統轄する実行委員会であった）が、当時の関西６大学野球リーグで、常に優勝争いに顔を出す程強力であった野球部の応援にあたり、他５大学に遜色無い活動をするためには、わが団にも是非ブラスバンドが必要であるとして、創設に乗り出したのが

吹奏楽部のそもそもの始まりだった。

応援団と吹奏楽は一般的なとり合せではあるが、本質的にはお互い相容れない組合せであったと思う。創部当時２５人分ほどの楽器が用意され、部員を募集したが、やはり応援団との同居をきらい、入部する人は少なかった。また発足寸前の吹奏楽部を応援団と完全に切り離して独立させようとした動きがあったが、これを察知した団の牽制により、簡単につぶされたこともあったと聞く。

このような状況から発足時のメンバーは１０名足らずであったと記憶しているが、この内の３人位は応援団との顔合せ練習をした翌日から顔を見せなくなってしまい、結局残ったのは７人程で、何とも心細い、前途多難を思わすスタートであった。

その頃のメンバーはそれぞれに個性の強い、おもろい奴が多かったが、特に思い出されるのはやはり“初代部長”鎌田隆康氏と、“初代女性部員”大島由美さん（この頃の人物と事柄には総て初が付される）それに初代指揮者兼コンサートマスター兼トラブルメーカーの山崎雄二氏の事である。鎌田氏は表現し難い味のある、頼りになる男であったが、氏からも本誌に寄稿されるということなので詳細は割愛させていただくことにする。

大島由美さんは私と同期であり、伝統ある書道部に在籍しながら高校時代やっていたクラリネットも吹きたいと、２足のワラジを履いた、これまた頼りになるお姉さんだった。短期大学部卒業後すぐに結婚したと風の噂に聞いた以外は連絡が途絶えてしまったが、彼女はレッキとしたＯＧ第一号なので何とか連絡をとりたいものと思う、彼女におごってもらった、喫茶“みどり”のコーヒーの味はホロ苦い思い出である。

さて初代指揮者、山崎雄二君についてであるが、彼は高校時代鳥取県下No.１のホルン吹きと言われた逸材であり、当時の学生としては、卓越した才能を持つ男だったが、応援団主導形で１０人足らずの

昭和４５年夏の合宿（木曽駒高原・ホテル駒王にて）
吹奏楽研究会として初の合宿であり、どうにか形ができた頃である。

バンドでは、活躍の場があまりにもお粗末で、持てる力が空転するばかりであった。しかしこれ以下はあるまいとさえ思える、当時のブラスバンドが、どうにか活動できたのは彼の力による所が大であったと言える。

なつかしい顔・顔……。

吹奏楽研究会の所以

昭和４３年春、幹部を交替した応援団が新組織となったが、前年度３人であった幹部が一きょに８人に増え、組織の型が逆ピラミッド型となり、バランスが悪くなった。この組織バランスの不安定化が、直後に発生した“事件”の要因となったことは否めない。

この“事件”とは、応援団特有の暴力沙汰に端を発するものであった。もちろん吹奏楽部員とこの事とは何の係わりもなかったのだが、この事件を契期に、応援団は“永久解散”処分を受け、応援団の傘の下にあった吹奏楽部も帰属すべき団体を失い、学友会からも、大学からも絶縁されてしまったのである。しかし楽器とボックスが没収されなかったのは、当局のせめてもの恩情と解釈し、この時点から吹奏楽部は『吹奏楽同好会』と名称を改め、孤立無援の非合法団体として再出発することになった。この時踏ん張ってくれたのが、前述の人以外に、富田真史君、中尾勇哲君と当時一回生だった松本久司君等であった。特に富田、中尾両氏は「やめたい、やめたい」とボヤキながらもついに最後まで残ってくれたし、松本氏は、この人抜きでは再建の話はできない程、力を尽してくれた功労者といえる。

この年の６月頃から、一回生数名を含め、署名運動、学文局への協力依頼、学生課との話し合い、嘆願書の提出など、あらゆる手を尽してみたが、解決の糸口さえつかめない状態が続いた。学内では我々に対し同情的な声も多かったのだが、やはり応援団の残したキズは予想以上に大きく、再建は困難を極めた。単なる音楽サークルを再建することに反対するのではなく、それを足掛りにまたぞろ応援団が復活するのではないかという意見が大勢を占め、重い足かせとなったのである。事実吹奏楽同好会（研究会）が学友会の認定を受けたのは、この“事件”を知る人達がすべて卒業して、

さらに１年を経た昭和４８年１０月になってからであった。

ボックス炎上

このような混迷を続けながらも、練習だけは続けた。単なる同好会としての活動なので、学内では練習場所を確保できず、稲荷山中腹、墓地公園（深草霊園）・名神高速道路のガード下などが主な練習場所であった。夏には小豆島で合宿も行い、未熟ながらも、再建に対する熱意だけは失うまいと努力を続け、奔走した。しかしすべての面で中途半端な存在であり、松本君を中心とする一回生グループが、同好会の在り方、練習の内容に問題点を投げかけ、一時離会してしまったが、無理のない事であった。

そんな矢先、現在の１６号館の北側附近にあったボックス会館から火災が起こり、楽器・譜面などを灰にされてしまった。“事件”から半年、一回生の離会など山積みにされた問題を何一つ解決できずにいる間に、今度は火災というアクシデントに見舞れ、さすがに「もうアカンわ」と思ったものである。

『災いを転じて福となす』という言葉があるが、火事の後始末に全員が忙殺される中から、折角ここまでやってきたのに、こんな事でやめてたまるか、という気がしてきた、とにかく最後までやってみようと気を取り直したのである。その年は結局火事の後始末だけで終ってしまったが、４４年から松本君等を中心とした旧一回生グループが、同じ思いにかられて、『もう一度やってみたい』と復帰してきた。この旧一回生グループの復帰が大きな力となり、昭和４５年には吹奏楽研究会と名称を改め、会則に『応援活動は一切行わない』という特別条項を盛り込んで、２度目の再出発を期したのである。

この時、学生課より会則の整備と同時に、同好会には学内の教授クラスの方が部長としてついていなければ活動を認めない旨を申し渡され、思案したが、当時の幹事長・中尾勇哲君が多分断わられると思うが、自分のゼミの先生に頼んでみる、というので断わられても仕方がないと思いつつ、お願いしてもらった所、引き受けてもらえる事になった。それが現在の我が吹奏楽部の師・経済学博士、岸田理先生であることは周知のとおりである。あのちっぽけな集団が、今日龍大を代表するクラブの一つにまで発展できたのは、先生のご尽力があったればこそである。

おわりに

以上、ダラダラと拙文を終わるにあたり、後悔していることがある。それは文中で

個人名を頻繁に掲げてしまったことである。冒頭にも書いた如く、人の記憶（特に自分の場合）は案外いい加減なものであり、個人名を書いた事に依り、その人達だけに功労があったような内容になっていないかと心配になってきた。

現在でも顔はよく覚えているが、名前を思いだせない人。諸般の事情から、短い期間で退部してしまった人等、今日の吹奏楽部ができるまでには、多くの人が働き、努力した事を付しておきたい。また応援団に関しても否定的な面ばかりを書いた、たしかに組織としては融合できる相手ではなかったが、個人的には再建のため、影から強く支援してくれた方もいたことを忘れることはできない。

創部15周年記念に寄せて

幹事長　轡　田　智　文

私たちは、吹奏楽・音楽を愛し吹奏楽部を選んだ者たちの集まりであります。この記念誌は、そのような者たちの歩んで来た道であり、これからの歩むべき道を指し示すものであると思います。また、とかく人間は現存するものに対して、何故あるのかという疑問を抱くことが少ない。今ここに吹奏楽部があり、過去を顧みて、それを知り、認識し、新たな一歩を踏み出す力としなければならないと思います。

発足して１５年が過ぎたと思うのは簡単だけど、この１５年は波乱万丈の日々であったことを知るのは有り難いことである。私たち若年者の感じる１５年は、赤ん坊から中学卒業までの年月であり、ある程度の人間形成がなされ、これからの一生を左右する分岐点に立つた時であります。しかしながら、人間の年齢のようにサークルの年齢を感じる訳にはいきません。人間は限りある生き者でありますが、この吹奏楽部は絶えることなく生き続けるものであって欲しいと願いたいからであり、いや、それ以上に重要なことは、大学生が自分たちでつくったサークルが１５年目を迎えたということであると思います。

この１５年は、いつもが分岐点であり、その時々の先輩方の苦労を知るのは、４回生になってからであろうか。

発足当時と現在とでは、社会の様子も変わり、ものの考え方や感じ方も変わったと思います。しかし、変わることなく流れ続けて来たものが現在の姿の中に生きている筈であります。

本年度の活動方針は、「部員各自の自主的活動による音楽性の向上と、団体としてのまとまりを強化し、課外活動として有意義なものとし、人間形成の場とする」であります。本学は、親鸞精神・仏教精神を建学の精神としております。龍谷大学の中の課外活動の一端としての我が吹奏楽部も、この建学の精神を基盤として、その独自性を発揮し、それを形として表わさなければいけないと思います。また、音楽を通して人間形成の場とするからには、集団活動や練習の中から得るものを積み重ねてゆかなければならないし未熟な精神では、人間に聞いていただけるような演奏はできないと思います。

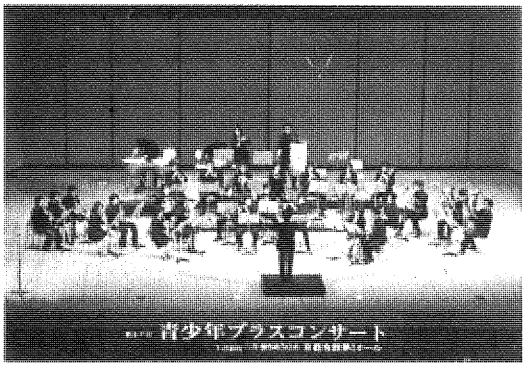
私たち学生バンドは、同じ目的を持ちそこに集い、約束事に従い、単に音を鳴らして自己満足するのではなく、各自が責任を持って音を奏で、音を楽しみたいものであります。

昭和58年夏合宿（信州にて）

沿　革

昭和42年４月　龍谷大学応援総部吹奏楽部創設。

43年　春　応援総部永久廃部にともない吹奏楽部解散。吹奏楽同好会として再発足。

45年４月　吹奏楽研究会に改称。

昭和47年 青少年ブラスコンサート出演
（京都会館第１ホール）

46年５月　京都府学生吹奏楽連盟加盟。京都５大学土曜コンサート出演。この年、龍谷祭開会式ファンファーレ演奏等活動活発になる。

47年１月　関西学生吹奏楽連盟加盟・全日本学生吹奏楽連盟加盟。

６月　第１回龍谷大学吹奏楽研究会学内演奏会開催。

48年10月　学友会学術文化局認定同好会となる。

定期演奏会パンフレット

昭和49年12月　第１回定期演奏会開催（府立勤労会館）。

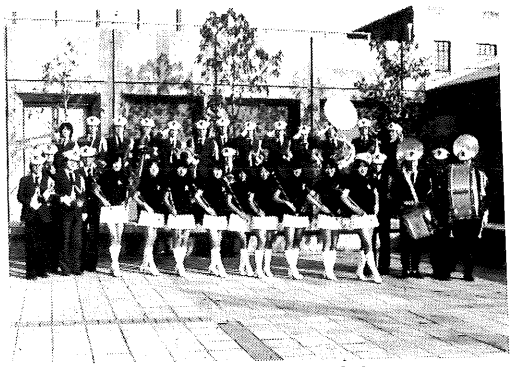
50年12月　第２回定期演奏会にて客演指揮として文字清氏を迎える。

51年９月　ＯＢ会発足。（２４人）

昭和51年10月　バトントワラーズ発足。

11月　龍谷祭パレード初参加（大宮～深草）。これより本格的にパレードを開始。

52年５月　降誕会パレード始まる（丸山公園～河原町御池）。



昭和51年 龍谷祭パレード初参加
（龍大図書館前にて）

53年８月　全日本吹奏楽コンクール京都府予選初出場（金賞受賞）。

９月　認定同好会より部に昇格。龍谷大学学友会学術文化局吹奏楽部となる。

12月　第５回記念定期演奏会（京都会館第２ホール）。

55年12月　京都大学吹奏楽連盟アンサンブルコンテストに於て初優勝（サックスパート）

56年12月　第８回定期演奏会にて初めてのステージドリルを行う。（京都会館第１ホール）。

昭和58年12月　創部15周年記念第10回定期演奏会（八幡市文化センター）

昭和53年 コンクール初参加〔金賞〕
（京都会館第１ホール）

吹奏楽部の思い出

今　井　健　二

大学を卒業してから9年近くたった。３０代になった今、自分の青春である吹奏楽の思い出を書きかけると数えきれないことが胸によみがえるのであって、とても原稿用紙２枚に収まりそうにない。そこで私としては、創設当時の苦労話は川島先輩や伊藤君などにまかせるとして、ＯＢ会の名簿にのっていない仲間を何人か紹介することで、お許しをえたい。

その1.　林　豊子（７０年入学)

酒屋の娘さんであって、当然酒豪。そのエピソードも数あるが割愛。当時「私は好奇心の強い女」という映画を見に行き、ボカしてあるシーンを必死で見たため目が悪くなったという伝説がある。このアルトサックス奏者は部の女帝として君臨していたのだが、72年の春、突如学校をやめてしまってその後消息不明である。「プロポーズ大作戦」に出て、きん枝に探してもらおうかと思っている。

その2.　森井寿広（７０年入学)

私の中学時代からの知りあいなのだが、哲学の勉強はまずフルートからという妙な理屈で入部してきた。当時としては珍らしくバイクに乗っていたため「哲人ライダー」とも呼ばれたが、ひげずらの口もとでフルートを吹くひわいな姿から、部の中では「ボボタン」という愛称がつけられていた怪人物、３年生の始めに、わけあって退部。現在、大阪で本の販売会社の経営者。

その3.　藤本佳男（７１年入学)

正確には部員ではなく楽友なのだが、演奏会の時は大太鼓をたたいたり、いすにふんぞりかえったりしている大人物。初の学内演奏会では司会してくれたのだが、一つの曲目紹介に４０分間しゃべるという怪挙を演じている。（私の結婚式の時司会をしてやると言っている…）現在は平安高枚の先生。

その4.　西原茂徳（７２年入学)

親鸞との出会いにより人生を知り、天地真理によって生きる希望が与えられたという、このまじめな人物は、音楽と酒を愛しながらなぜかその身を部にまっとうできなかった（たしか大学は５～６年通っているはずである）。今は故郷の福岡で、中学枚

の先生。

吹奏楽と関係のない話をしたようだが、次のことをわかってほしい。すなわち

◦さまざまな人物が有形無形に吹奏楽を支えてきたこと。

◦部とは、いろんな人と出会い自分を大きくする場だったということ。

最後に一言、「どんなきれいな曲よりも、どんなきれいな音よりも、僕をはげましなぐさめた龍大の吹奏楽こそ世界一」

ＯＢ会の会報を見て驚きました。中橋氏というのが三郷中学校へ勤めてるんですね。僕とちようど入れかわりになったのだけど龍大吹奏楽にいたとは知らなかった。奈良県警の池尻、県庁の森岡など奈良県人会も多くなったようです。ところで桜井市役所に勤めている森岡というのは森岡道朝氏の弟かだれかにあたるのでしようか？　お教え下さい。(だからといってどうということはないのですが)

奈良にもいくつか市民バンドがあり、僕も４年前までは橿原市吹奏楽団にいましたが今は何もしてません（家でギターをいじったり、ケーナを練習したりはしてますが)。京都にも足が遠のいてきていますがそろそろ元気を回復したいと思ってます。では皆様によろしく。

昭和４８年夏の合宿（信州）

認定同好会への道

中　井　一　裕

早いもので卒業以来８年以上たち、こうして原稿用紙に向かい現役当時を思いおこすと、楽しかった事、苦しかった事など色々と思い出される。

近くの喫茶店のM子ちゃんを二人で取りあったＫ君とＩ君。失恋のあまり休部し、下宿にこもり続けているところをつれ戻したM君。運動クラブに強制的に入れられたところを、かけあいに行き入部させたが、しばらくして麻雀に狂い、クラブに出てこないので下宿まで行って説得し、クラブを続けさせ、最後までやり通してくれたＮ君。皆元気にしているだろうか。

私が入部した昭和４６年頃は部員も１０数名、楽器も少なく、満足な練習場所もなく、よい演奏など到底できない状態でありました。私自身、中学から吹奏楽を始め、コンクールでは常に上位入賞している伝統のあるクラブで育った者にとっては、あまりにも貧弱で満足いくものではなかった。しかし、このような状態のクラブにあって私が心の支えとしてきたのは、現在どんなによい演奏をするクラブも最初からよいはずはなく、日々の努力によって成し遂げられたのであり、現状維持もしくは下降しかないようなクラブよりは、今はどん底でも日々の努力で、いくらでも向上していくクラブであるという事。そしてもう一つは、今はＯＢ会長として現役の面倒を見ていただいている川島先輩が苦労してクラブを守ってくださった事であります。応援団によって質入れされていた楽器を先輩等が引出し活動を始められたのであります。龍大の吹奏楽部は本当に音楽を愛する諸先輩が苦労して始められたクラブであり、この意志は守り続けなければならないと思うと同時に誇りにさえ思いました。この話を、時にはくじけそうな部員にすると、皆理解し、以前にも増して頑張ってくれたものでした。皆の努力により部員も徐々に増え、なんとかまとまった演奏ができるようになっていったのです。それに伴って学外、学内における実績も増し、評価も得るようになり昭和４８年には長年の願望でもあった学術文化局の認定同好会となったのであります。今でもあの時の感激は、はっきりと覚えています。日々の活動が認められ学術文化局でも吹奏楽研究会を認定してもよいのではないかという事になり、音系サークルの後押しもあって趣意書の提出となったのです。原案は先輩の考えられたものがありまし

たが、会則が十分ではなく、他大学の部則を参考にする為訪問し、意見を聞きクラブ内で十分検討して作ったのですが、それからが大変でした。罫紙による書類の作成、これは山田さん（現 伊藤夫人）が授業も休んで徹夜で書き、学文局会議用のガリ版刷り作業など忙しい日々が続き、やっと学文局会議に提出したのであります。その結果満場一致で承認され晴れて学術文化局の認定同好会となったのであります。現役の皆もよく頑張ったが、それ以上に先輩の方々が苦難を乗り越えクラブを守ってくださったおかげだと思います。狭いがボックスももらえた。雨漏りがし、床の抜けた部屋ではあったが、それでもうれしかった。皆が集まれる場所ができたからである。現在では、立派な部室と練習室があり、演奏面でも相当の向上をみています。今後とも現状に甘えることなく、よい演奏をするためにより一層の修練と、クラブの発展を祈っております。

回　　想　── 第１回定期演奏会の思い出 ──

喜 多 直 哉

昭和４８年　４月

「部員は何人ぐらいですか。」

「ウーン、今年の新入生を入れて何とか３０人には」

「楽器はあるんですか。」

「あるにはあるけど音の出にくいのばかり。」

「年間の活動はどんな事を。」

「年２回の学内演奏会と、あとは適当に。」

今からちようど１０年前、入試も終り再び音楽を始められると希望に胸をはずませて吹奏楽研究会とやらの門をたたいた私の夢は、このような先輩との会話で、ものの見事に打ち砕かれた。

（これじゃ高校のレベル以下だな…）と思いつつも暇をもてあます４月の新入生には、学生生活のあまりの虚無さに絶え切れず、いつの間にか毎日練習に顔を出すようにな

ってしまっていた。当時部員は先輩面接官の思惑通り３０名程度にはなっていたが、練習に顔を出すのは１０名前後、そしてお茶をにごす程度の練習が毎日続く。何に限らずとも目的のないまま日々をすごすほど苦痛なものはない。同じ夢を持ってクラブに入ってきた仲間が一人二人と去っていく。

そのような練習がほぼ１年続いたある日、「今年は初めての定演をやるぞ。」となった。誰が言い出したやら「金は？」「何で今年やるの？」そんな議論は一切なし。とにかくやってみよう、という事で準備にとりかかった。

自分達の力で自分達だけの演奏会を開くという事はそのクラブにとって大きな成長を示すことになる。あのようなちっぽけなサークルでも、いずれは大きなステージに満員の聴衆を集め、思い切り演奏してみたい。そう思ってはいたけれど、演奏技術や部員数を思えば、期待より不安が先に立つスタートであった。

日時、会場、曲目などは決まったものの、練習内容は相変わらずで、演奏会まであと１ケ月、半月と迫ってきても曲は一向に出来上らない。長い間練習に来ない部員を訪れては定演の出演を依頼する。京都産業大学に足を運んでは足らない楽器の交渉や、応援演奏者との打ち合せをする。練習よりもそんなことで費す日が多い。

色々な悩みをかかえながらも、いよいよ第１回定期演奏会の当日を迎えた。とにかく曲が途中で止ることのないよう、無事演奏会が終ってくれればよい。それだけを願いながらの開幕だった。ステージから聴衆の数を数えてみる「一人…二人…」。一つ

昭和50年第２回定期演奏会にて、ＯＢよりお祝を受ける。（府立勤労会館）

の曲が終る。形だけの拍手がパラパラ…。みじめだった。最後の曲が終り幕が降りると何かほっとした気分が全身を走り、感激も何もない演奏会が終った。

その後、私達の間でさまざまな議論が行なわれたこれは言うまでもない。「こんなクラブやめてしまう。」という声も出る半面、心の中は、やはりもっと音楽をしたいという気持も強い。誰れもが自分の心の中にある矛盾と闘いながら深夜まで議論が行なわれた。部室だけでは結論が出ず、誰かの下宿へ集まってはまた同じことを続ける。そしてそれが毎日毎日くり返される。

今となっては第１回定演をとにかく開いたという事よりも、何かを探しもとめて、青春をぶつけ合ったこれらの日々の方が無精になつかしく思える。そしてそれが無駄でなかったことは、今年いよいよ第１０回目の定期演奏会が行なわれようとする事でも証明できるのではなかろうか。

すでに定演に顔を出さなくなってから久しいが、聞くところによると今や京都の大学の中で、最も盛大な演奏会になっているという。本当に嬉しい。後輩諸君がよくここまでやってくれたと思う。そして少なからずとも、我々がその基礎の一部を築いた事を誇りに思う。

１５年誌によせて

福井　稔

私が入部した時代はまだ同好会で吹奏楽研究会という時代でした。ＢＯＸもありませんし、楽器置き場に軽音楽部の倉庫を貸りている時代です。現在のように立派な練習所もありませんでした。４回生になってやっと紫朋館ができ、ＢＯＸがもらえました。龍大の一サークルとして、何かうまく時代に乗れたと思います。現在は、川島会長より、今年で１５年目ですが、学生の中で生まれたものがよくここまでなったものだと思います。昔は、クラブの存在そのものが問われる時代でした。今のように龍大を代表するようなバンドになるとは誰も思わなかったと思います。川島会長も感慨深いものがあるでしょう。それにしても岸田先生には顧問を長い間していただき

まして、本当にありがとうございました。これからもよろしくお願い申し上げます。

さて吹奏楽部も誕生して早くも１５年目に入りました。学生の気質も昔とはずいぶん変わってきています。それと同時に大学のバンドの形態も、徐々に変化していくと思います。私は先の大阪城築城４百年祭の御堂筋パレードにおいて、近畿大学のマーチングバンドを見まして、非常におどろきました。一大学における１５０名強のマーチングは、昔では、考えられませんでした。大学間では、近大が別格のように思われますが、私はそうではないと思います。それだけ世の中に吹奏楽、いやマーチングバンドというものが受け入れられてきた結果だと思います。（もちろん近大自身の努力もあるわけですが）これからの大学の吹奏楽の形態もいずれは、近大のように、いわゆるアメリカの大学のバンドのように変化していくのではないかと思います。ひょっとしたら、２１世紀には、これが主流になるのではないか、何かそんな気がします。

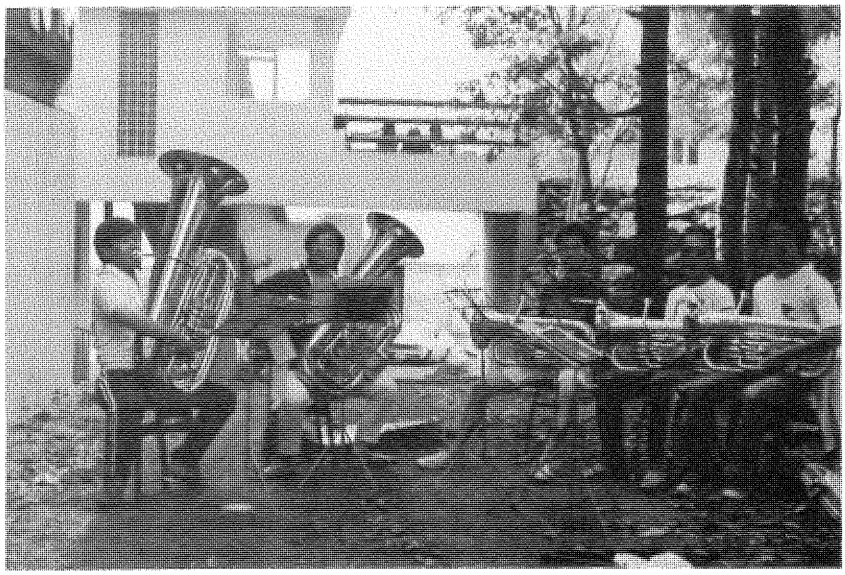
昭和51年第３回定期演奏会リハーサル風景。（府立勤労会館）

ＯＢ会結成

熊　谷　法　明

中学校では楽器を吹く喜びを、高等学校では合奏する喜びを、そして大学ではその喜びは自分達でつくらなければならないことを学んだ。そしてその喜びを追求して、気づいたら大学生活を終っていた。これだけ吹奏楽に没頭して学生生活を過ごしたことに非常に満足を感じ、また誇りに思っている。

私は、第１回から第４回までの定期演奏会の時期に現役時代を過ごしたが、よく定期的に続けてこられたものだと感心している。楽器を吹き、合奏をし、みんなに自分達の音楽を聞いてもらうことがどんなに難しいことか、いやという程感じさせられたが、私を４年間、いや正式には５年間吹奏楽部にとどまらせたのは、私自身が楽器を吹きたかったことが第一の要因だが、先輩方の影響も大である。喜多さんにはクラブの運営の方法、沢田さんには楽器の吹き方、合奏のやり方、福井さんには連盟の中の龍大の使命、大学吹奏楽連盟の一員としての自覚、学生課の先生には、吹奏楽が学内のサークルとしての歩んでいく方向、また伊藤さんには酒の飲み方と数々のことを教



昭和52年夏の合宿風景（信州にて）

えられた。（当時沢田さんは関西に鳴り響くラッパの名手として知られ、福井さんは全日本学生吹奏楽連盟の副委員長であった。）そしてもう一人、ＯＢ会長の川島先輩がいる。

高校時代までは両親はじめ多くの友人が発表の場に応援に来てくれたが、大学では誰も来てくれない。そこで現役部員の励みになるようにと川島先輩に相談してＯＢ会を結成してもらったのである。そこで第１回のＯＢ総会が、完成して間もない紫朋館で開かれたのである。私が３回生の９月であった。

もう一つ自慢に思っているのが、同回生のチームワークの良さである。男子５人。それも金管ばかりであったからであろうが、この少ない人数でよく２年間も幹部をやれたものだと思う。（この時より３回生幹部より４回生幹部となり現在の形になった。）

この１５年の歴史の中で、私が在籍したのはちょうど中程になり、先輩から後輩、現役諸君にいたるまで幅広く友人になれたのは幸いである。

龍大の吹奏楽を通して、楽器を吹く喜びを、合奏する楽しさを一人でも多くの人が味わって、そして、ともに後輩を励まし見まもってゆきたいものである。

龍谷大学吹奏楽部
創部１５周年を記念する

大　西　敏　徳

まずは、現在活動を続けている現役の部員の人達に、ひとこと、「御苦労さん、そして有難う。」と言っておかねばならないでしょう。続いて何といってもこの１５年間、弛みない活動を通じて吹奏楽部をこれまで存続し発展させてこられた卒業生の方々、並びに御世話になった音楽関係諸先生、そしてその間ずっと顧問として、数々の助言を与えて下さった岸田先生に、心からの祝意を表わしたいと思います。

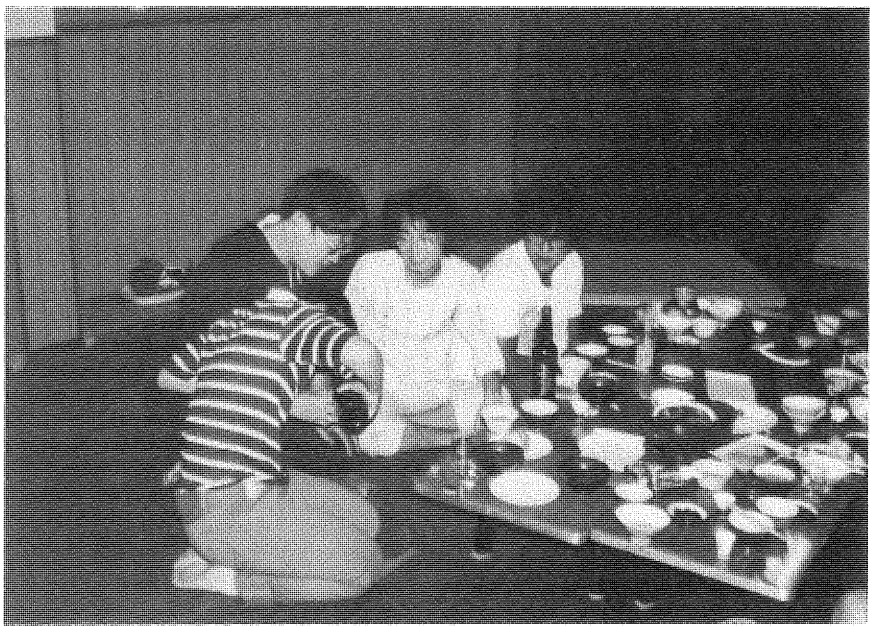
さて、本文の主題は「創部１５周年を記念する」ということです。が、「記念する」ということは、「過ぎ去った物事を想い起こすこと」です。

僕が、吹奏楽部に籍を置いていたのは、昭和５０年から５３年までで、１年生の定

期演奏会は、府立勤労会館で行ないました。何かとても手狭で、舞台の上ばかり人が混んでいて、客席の方はひどくガランとしていた感じだけしか想い起こされてきません。

「記念する」といっても、年１回の定演の記憶ですらこの程度のものなので我ながら困ってしまうのですが、吹奏楽部の歴史であるとか、それぞれの期間における活動の状況、状態といったような詳しく細かい事柄については、どうも苦手なので、失礼ですが他の方の文章に頼らせて頂くことにして、この１５年間の中の現役として在籍していた４年間という活動の流れに、自分は、どのように対処していたかを考えてみたいと思います。

勿論、今でも学生の音楽に向ける理想と情熱は高く激しいものですから、毎日の活動そのものは、苦しいことが多く試行錯誤のうちに過ぎて行くものだと思いますが、僕の現役だった頃は、全く文字通り五里霧中でただやみくもに楽器に息を吹き込み音を鳴らし、自分達は一体何を目指し、何から手を付けていったらよいのか解からないまま、自分達の音の集合が生み出すであろう効果や結果などは、考えねばならないことではあったけれど、ほとんど眼中にはなく、今思うと、まるでクジ引きのクジを引



昭和51年夏の合宿でのコンパ風景（福山にて）

くような思いで、曲を決め練習し、種々な演奏会をこなしてきたような気がします。

こんなことを書くと、当時一緒にやっていた仲間達に、「そんなことあるか！」と叱られそうですが、少なくとも3回生位までは、いうならば、酒に酔って気分が高揚しているうちに、定演を3回やってそして、気が付くとその時々に演った曲のあるパッセージを自分の指だけがなんとなく覚えているだけといったような、そんな感じでした。

ただ、4年生になり、自分の上級生が誰もいなくなった時、ふと1年生の時の定演の記憶が蘇えり、そこで思ったのは、「沢山の人に聴いて欲しいなぁ」と。そしてその為には、どうしたら良いのかな？　という事でした。そして、その答は、“人”と“場所”と“お金”の3つの問題を解決することでしかない、と。

京都という都市は、はっきりいってプロが音楽活動をリードしていないと思うのです。大学生が、真に純粋で豊饒な音楽を町にひろめ、みんなをまきこまねばならないのだと思ったのです。

数日前の朝日新聞に今年の吹奏楽コンクールの評を服部公一氏が書いておられて、その中に、中学生が、リヒャルト・シュトラウスを、高校生がストラビンスキーをいとも簡単に、そしてけなげに好演してみせたと感動しておられました。その中学生、高枚生達が、大学に入って来る。

我が龍大吹奏楽部は、先程書いた3つの問題点の内の、場所（紫朋館）、と財政的な面についても色々と工夫をして良い方向にむかっていると思います。ただ、“人”について、今書いたような、人たちが入ってくる部としてこの15年間の歴史をいかして、部が発展し、そして、彼らが活躍できるよう期待し、自分もその一助になれたことを誇りに思いつつ記念の辞に代えたいと思います。

サックスと私

川上泰司

私は高校に入って、初めて管楽器に接しました。別に何の楽器が吹きたいとハッキリとした希望もなく、私の目立ちたがり屋の性格と他に希望者がなかったという事で、トランペットを吹く事になりました。１～２年は何の抵抗も無く吹いておりましたが、目立ちたがり屋な性格のわりには、吹いてみないと何の音が鳴るかわからないトランペットに段々と恐怖心が湧いてきました。そして３年生になりクラブの中でわりと自由な立場になりましたので、その折りに色々な楽器を吹いてみました。もちろんどの楽器を吹いたところで、まともな音は鳴りませんでしたが、ところがどうでしょう。サックスだけはそれらしい音で鳴るでは有りませんか。運指もたて笛と似た様なものだし、符面もト音記号で読み安い。『ハハーン　さすが汽車の窓からマウスピースを出しただけで音が鳴る…？といわれる楽器だなァー』と思いました。

そして大学に入り迷わず吹奏楽部に入りました。（当時は吹奏楽研究会でして、私は吹奏楽なんか研究していったいどうするのだろうかと思いました。）そしてサック

昭和54年龍谷祭パレード前（大宮学舎にて）

スを希望しました。ところが何とその年はサックス希望者が５人だか６人だかおりサックスに留まるのは至難の業で有りましたが私はもうこれしか無いと思っていましたので、なんとかしがみつき、見事に日管のボロテナーを吹く事になりました。でも当時は、私の高校の楽器は本当にボロ楽器で光っている楽器イコール良い楽器というイメージが頭に叩きつけられていたものですから、そのテナーもけっこう良い楽器だと思って使っておりました。しかしサックスも練習を続けるに従ってそのむづかしさがわかり出し、なかなか上達しない自分に少々の焦りを感じました。もともと人数の多いサックスパートでありましたので、押し出されるように指揮へと流されていったのであります。

創部１５周年によせて

宮　本　まゆ里

創部１５周年おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。発足当時は１０名足らずのみなさんが集まり、同好会としてもなかなか認められないという状態の中で練習を続けてこられていたそうですが、今日では、数多くの方々が卒部され、他大学と肩を並べ、またそれ以上の吹奏楽部としての活動をされています。それらは、ひとえに諸先輩方をはじめとし、それを受け継いでこられた後輩の方のたいへん大きな努力の結果だと思っています。１５年 ── と一口に言ってしまえば本当に簡単ですが、赤ちゃんがオギャーっと産声をあげ、ハイハイ・ヨチヨチを経て幼稚園小学校と進み、中学校を卒業するまでの長い間 ──とても大切な時期であり、また難しい時期であったとも思います。そんな中に２年間、私は高校時代の友人を通して他大学から楽友としてクラブの一員に入れていただきました。小学校時代に新しくできた鼓笛隊に興味半分に入ったのが切っ掛けとなり、途中とぎれたりもしていますが、中学・高校と続けてきました。年数だけで基礎も十分にできていない足でまといな私を、イヤな顔も見せずに、やさしくそして時には厳しく指導もしていただきました。ともすれば、家と短大の往復だけで終わっていたかもしれない学生生活をとても楽しく充実した日々として送ることができました。自分の学校にいるよりも、龍大にいる方が長かったの

ではと思えるほどでいろいろな行事への参加も、自分の学校のはほとんどわからず、気がつけば終わっていたり素通りしていたりという具合で、よく「どっちが自分の学校？」などと友達にからかわれたりしていました。最初の頃は、紫朋館の出入口を通るのが何となく遠慮気味で、誰も知らないと思いながらも私は他所者という気持ちがどこかに潜在し、すれ違うだけでも「どうしょう…」などと思ったりしたものでしたが、恐しいことに２年めには、自分が龍大にいるのが当然のように、あるいは本当の龍大生以上に堂々としていたような気がします。

私の学生生活イコール龍谷大学吹奏楽部でありました。本当に良き先輩、良き友達に恵まれていたと思います。今、こうして書いていても、いろいろなことが、昨日のできごとのように思い出されてきます。

この１５周年を機に、今後共みなさんの力強い団結でより一層努力され、ますます発展躍進されていくことをお祈りします。

―― 秘蔵写真特別公開 ――

合宿中、男子部員は入室禁止の女子部屋。編集責任者の強い希望により公開された唯一の写真。

（あえて年代は記録しません。一児のママの顔もチラホラ。）

昭和51年の龍祭パレード（七条烏丸にて） まだ市電がある。

バトントワラーズより

バトントワラーズＯＧ
上　田　かおる

龍谷大学吹奏楽部に御縁のある方、かって御縁のあった方、はたまた、なんとかこのいわく因縁のある吹奏楽と縁を切りたいと現在も必死にあがいていらっしゃる方、皆さんお元気ですか。はやいもので創部１５周年をむかえられたとのこと、本当におめでとうございます。

縁はいなもの味なものと申しますが、私もいささか御縁ありまして、（幸か不幸か…〃）大学生活４年間をバトントワラーズの一員として御一緒させて頂くことができました。

先輩に連れられて初めて紫朋館三階のボックスに入った時、ボーッとした男性が三人ほどおられて、なにか悪いものでも見たような気がいたしました。そんな不安な想いのまま付き合いは始まったのですが、２０才にもなろうとする若い女性が短いスカートをはいて棒をまわしたり足を上げたりするようなはしたないマネができるかと、やめるのやめないのと言いたいほうだい。人の迷惑顧みず、うだうだ、ぐずぐず、降誕会もしかり、龍祭もしかり、メンバーがそろわず、一時はたった４人でスカイハイを踊ったことを覚えています。メンバー全員が顔をそろえるのは、食べ物が山ほどあ

って、お酒が飲める時だけと決っており、当時バトントワラーズ気質ともてはやされたものでした。こんなバトンの存在が、現在も龍大から姿を消さずにおれるというのは、ひとえに吹奏楽部の、とくに男性諸君のあたたかいお心と、寛大なお気持ちによるものと、心より、感謝しております。

吹奏楽も部に昇格し、部員も増え、ステージドリルや、種々の曲目をこなし、どんどん大きくなってこられました。少しでも、そんなステージや行進に、華やかさをそえることができればと、バトントワラーズ一同、願ってやみません。

一層の御活躍をお祈りします。

昭和53年の龍谷祭パレード前（大宮学舎にて）

Let's Fever Marching On

外川高良

「マークタイムマーチ」!!! 私が声をからして叫んでいたころからもう2年もたってしまった。マーチング、特にドリルに関して、本当にズブの素人であった私が、よくドラムメジャー（以下、DMと略す）という役職がつとまったとつくづく思う。これも、ドリルメンバーが、このような私を、よく盛り上げてくれたからであり、あの第8回定期演奏会でのステージドリルも、私だけの力ではなく、メンバー全員によって成し得たものである。

ドリルは皆でする一種のチームプレーであり、野球に代表されるその類似点をあげると、「チームプレー」に撤するチームは強いといわれるが、私の元で動いてくれた兵隊たち（ドリル隊）は、その「チームプレー」に撤することができ、盛況の内にステージドリルの幕をおろすことができたと考える。

DMが、フォーメーションをつくり兵隊たちがその通りに動く。兵隊たちがフォーメーション通りに動こうとするには、それなりに兵隊たちにその基礎力が要求される。基本練習はドリルを仕上げるうえで最も重要なのである。このような基本練習を行ない演奏会でのステージドリルを造り上げるまでには、いろんなエピソードがあった。

エピソードの筆頭に出てくるのが、あの魔の鈴鹿サーキットでの依頼ドリルであろう。あれは、私が3回生の時である。当時、川崎先輩がDMをなさっていたが、メンバー不足の為、SubDMの私がDMをやることになった。現地についてからすぐさま本番のリハーサルが行なわれたが、その時のことである。予定ではP.M7～P.M9 or 10まで行なわれるはずであったが、NGの連続。OKが出た夜中の2時半まで「7時間半、耐久ドリルリハーサル」を行なった。この時のメンバーの鬼のような形相と言ったら、その場にいた人でなくては、理解できないであろう。この時のメンバーは、この事があってからというもの、鈴鹿へは、2度といきたくないと思ったにちがいない。

それから半年、みんなも鈴鹿の出来事を忘れかけていた時。またしても、鈴鹿サーキットの依頼があった。しかし、話を聞くと、ドリルはしなくてよいとのこと、メンバー一同は胸をなでおろし、再度鈴鹿へ……。

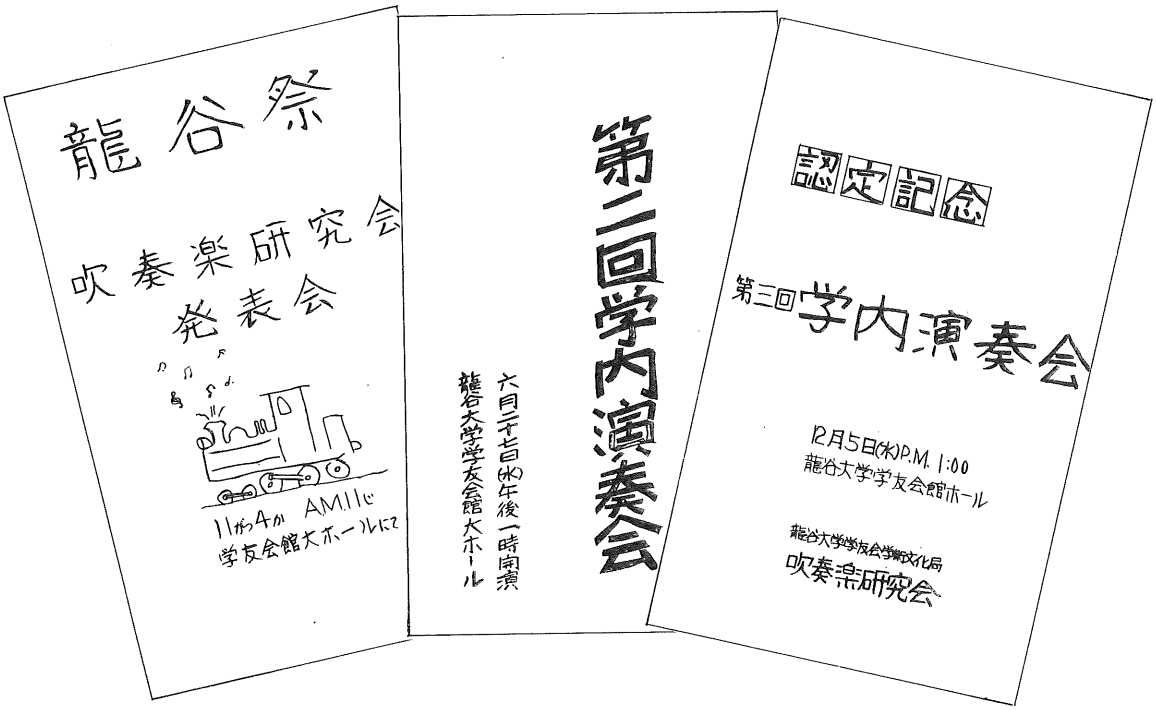
道中のバス中で、冗談で「もしドリルがあったらどないしょう」と言って笑っていたが、その「もし……」が現実に起こるなどとは、だれも考えていなかった。しかし、その「もし…」が現実に起こってしまった。現地につき、鈴鹿の担当者に「ドリルやってくれるかぁ～」と軽いお言葉。それを聞いたメンバーの、かなしそうな、かつ冷やかな目を私は今も忘れることはできない。その時のメンバーは、とうていドリルが出来るメンバーではなく、人数においても、しかりである。しかしやれといわれればやり通すのが龍大魂。

SubDMの中館と共に、即席でフォーメーションを書き、それを仕上げるまで、例のごとく夜中の3時までかかって本番に間に合わすといったはなれ技を成しとげた。このときは、前回の鈴鹿のドリルとはちがった充実感があった。苦しかったが、メンバーも、私も、何かを得たような気がした。

このような現場を数多く経験し、一歩一歩進んできたことが最終的にステージドリルの成功といった形で表わすことができたのだと思う。龍大吹奏楽の歴史の中で、DMという役職は、比較的新しい。初代、太田文夫先輩、2代目、亀野鎮久先輩、3代目、川崎英明先輩。そして私は4代目にあたる。

ステージドリルが私達の代で初めて行なうことができたのも、ここにあげた先輩達の積み重ねがあってのことであり、私も何らかの形でこれからも、後輩の為に協力していきたいと考えている。

昭和56年関西合同演奏会の情宣



学内演奏会のパンフレット
左より第１回（昭和47年11月）第２回（昭和48年６月）第３回（昭和48年12月）。
尚、第４回は昭和49年６月に、いづれも学友会館大ホールにて開催された。

▲昭和48年
龍祭仮装行列
（深草キャンパス）

▼昭和49年
龍祭開会式ファンファーレ出演
（図書館前）

◀昭和51年６月土曜コンサート金管アンサンブルにて出演。突然の雨にて会場はパラソルの花が咲き、ステージのすぐ側まで来るお客も
（円山音楽堂）

◀昭和52年夏の合宿より
一見航空写真風の貴重な写真。

▼昭和54年
京都会館第２ホールでの演奏会前の緊張した顔。
なかには、トボケた顔も？

▲昭和54年秋
紫朋館の屋上にて

▼昭和55年龍谷祭出店
（メニューはお好み焼）

▲昭和58年６月 定期ＯＢ会後の現役との親善ソフトボール大会（深草グランド）

▲昭和48年 春合宿

▼昭和50年 夏合宿

春夏合宿風景

▲昭和52年 夏合宿（恒例の回生別ピラミッド）

新たなる誓い

昭和59年度幹事長　密　　祐　浩

今年で創部１５周年を迎え、第10回定期演奏会を開催し、私達の想像をも計りしれない先輩方の努力が実り、私達がいるのだということを、今改めて痛感している。

近年、学内外での演奏活動が増え、数多くの人達に私達の演奏を聞いて頂けるようになった。部員数も徐々に増えて、毎年５０人近くの人数で活動できるまでに成長してきた。しかし、「５０人いれば、それなりの演奏ができる。」「下手は下手なりに…。」という考えが、心の底に潜んでいるのではないか。アマチュアだからという甘えが通らない状況になりつつある。いや、もうなっているのだ。己に厳しくなくてはならない。自己満足に浸っていては、いつまでたっても「井の中の蛙」である。自己満足より脱皮し、より広い世界に出て行かねば向上は望めない。今年から、京都市立芸術大学助教授・上埜孝先生に指導して頂くことになり、テンポ・ダイナミックス・曲想など、あらゆる面に関してより繊細な演奏が望まれるようになり、集中力・忍耐力が不可欠なものとなってきた。また、ステージ・ドリルは３年目をむかえようやく軌道に乗ってきた感はあるが、情熱と気迫を「魅せる音」として表現するにはまだまだ未熟であり、今後研究し、練習を重ねる余地は充分にある。

「ぬるま湯」に首まで漬かった学生が多い中、休日のない厳しい練習に耐え、その中で多くのことを学びとり、充実した学生生活を送れることは、この上ない幸福であると思う。この幸福を与えて下さった先輩方に恥じることなく、龍谷大学吹奏楽部としての誇りと自信に満ちあふれた演奏をすることを、今ここに誓う。

我々に課せられた期待と使命は非常に重い。しかし、その重責に耐え得る、強靱な精神力を部員全員が秘めていることを、私は信じて止まないのである。

昭和58年秋 伏見桃山キャスルランドにて

創部１５周年をむかえて

吹奏楽部相談役　杉　野　文　篤

龍谷大学吹奏楽部に一年余しか在籍していない私が、ＯＢ諸兄の御厚情をもってＯＢ会会員に加えて頂き、また、57年春より吹奏楽部相談役という大役をおおせつかって２年が過ぎようとしています。創部15周年にあたり、現状と展望について私見を述べたいと思います。

近年、龍谷大学吹奏楽部は、学内・学外を問わずその活動の頻度は増し、多様化しつつあることは周知の事実であります。また、日本の吹奏楽の音楽的水準が急速に上昇している今日、龍谷大学吹奏楽部にとっても、その質的向上は、内外の要望であるばかりでなく必然性をもって考えなければならない時代に至っていると思います。過去、文字清先生を音楽監督にむかえ、昭和53年夏、京都府吹奏楽コンクールに初出場し金賞を受賞、音楽的基礎作りに取り組み、本年春より、上埜孝先生（京都市立芸術大学助教授）の御指導を得て、より本格的なシンフォニックバンドへの道を歩みつつあります。

マーチング・ドリルへの積極的な取り組みは、５、６年前より始まり、定期演奏会・依頼演奏において不可欠のものとなっています。１５号館屋上で８期生沢田君が、必死に半ばあきらめ顔で依頼演奏に備えてトリックターンを指導していたことが懐しく思い出されるとともに、現在、カラーガーズを含めて５０名編成になろうとするドリル隊を見るにつけ隔世の感を禁じえません。

シンフォニックバンドとマーチングバンドの両立ということが、今日の龍谷大学吹奏楽部に課せられた大きな課題であり、当然、両者ともに質的向上をはかっていかなければなりません。

運営面においては、高価な楽器の購入や演奏会などの資金が膨大な額に達しており、部員の個人負担金が急増しつつあります。また、部員数の増加とともに部内の統制や対外的交渉など、これまでどうりにゆかない新しい問題も多く出てきております。現役諸君には、諸先輩の不屈の龍大魂を正しく継承し明日へより大きく翔いてもらいたいと思います。

最後になりましたが、岸田先生をはじめとし学生課の方々、また、吹奏楽連盟の諸先生方、龍谷大学吹奏楽部に絶えまぬ御厚情を賜りました諸兄に御礼を申し上げるとともに、尚一層の御指導を御願い申し上げます。

ＯＢ会住所録

（名誉会員）

岸田　理

（１期生）

鎌田　隆康

川島　謙一

（２期生）

中尾　勇哲

山崎　雄二

富田　真史

（３期生）

松本　久司

高橋　秀典

（４期生）

小林　直子
（色川）

嶼　秀誠

野瀬　重二
（古橋）

丸田　学

（５期生）

伊藤　真

平井　貢二

今井　健二

森岡　道朝

三輪　春人

白江　順昭

福山　恵子

（６期生）

中井　一裕

福本　良樹

細川　公子

伊藤　映子
（山田）

（７期生）

吉元　譲二

中尾　玲子

杉野　文篤

（８期生）

池尻　博彦

岩田　敏夫

小林　福重

福井　稔

吉岡　秀和

喜多　直哉

原　靖博

沢田　博明

熊谷真喜子
（中野）

西本　幸治

田中　範子
（平沢）

前田　訓良

北村　雅明

（９期生）

岩中　正則

熊谷　法明

高垣　弘和

林　浩嗣

三原　豊

長岡　史子

浅原　淳子
（三上）

（10期生）

占部　智教

岩城かおる

大田　文夫

大西　敏徳

滝本　秀信

中島五月子

長野　洋二

三輪　理枝

浜田　紀子
(精松)
高嶌　清子

宮本まゆ里

川中　久子

(11 期 生)

赤尾きよ子
(足立)
大西　典子
(阿部)
大江　智城

亀野　鎮久

川上　泰司

大江かおり
(鈴木)
仲　紀弥

中橋　寛隆

西守　健次

高垣　祥子
(水尾)
中西　史郎

(12 期 生)

大久保美智子

川崎　英明

小林　秀紀

浜田　輝夫

森岡　弘行

横田美奈子

服部　浩子

橋本　孝子

(13 期 生)

明山　晃映

上道　郁夫

尾山　雅彦

神谷　良嗣

木村　晶子

高田　享

外川　高良

中筋　謙和

中田真由美

箕浦　良信

森　芳磨

森永　隆雄

山沢　峰忠

豊沢　義彦

小川理津子

(14 期 生)

熊谷　正明

高尾　哲世

中館　一人

南葉　洋子

春田　芳枝

増田　琢也

間瀬　吉浩

松川　隆之

長野　美映
(森川)
三好　秀子

平田　和江

小野　文子

西　満世

安井　佐江

部　員　住　所　録

4回生

井上　憲洋

今坂　好子

木阪美和子

轡田　智文

中野　良浩

二井見　晃

深田　恭子

堀部　英彦

松本　茂雄

安藤　昭丸

大原　延恵

北野　弘子

武永　織子

栃尾　賢治

福田　康治

三谷　達也

密　祐浩

3回生

阿古　雅樹

八島　雅彦

2回生

石田　紀子

大嶽　正則

奥村　俊哉

河股　利則

清川　徳子

小崎真理子

佐野美寿穂

竹中　靖雄

中井　英喜

平元　克也

松村　浩司

松本　俊治

松本美樹子

水嶋富美子

村上　宣人

森　　茂雄

1回生

小野　耕平

阪井　章夫

坂本　英之

桜場　　浩

鄯　由美子

杉阪　英明

筒井　　功

西口　　勲

広田　敬順

藤本真由美

若江　敬子

藤沢　浩史

―― 編 集 後 記 ――

龍谷大学学友会学術文化局吹奏楽部創部１５周年の記念行事の一環として、顧問岸田理先生の発案により、この記念誌を発刊する運びとなりました。

１５年といえば、サークルの歴史としては短いようでありますが、その間、１００人余りの人たちがこの吹奏楽部に籍を置き、青春の熱き時代を音楽に打ち込んでまいったのであります。そうした個々の歴史を一本の線として、また“青春の思い出”として長く留めるとともに、後輩諸君への有意義なアドバイスの意味をこめて、この記念誌の編集にあたってまいりました。

最後に、本記念誌発刊にあたり、数々の助言をいただきました関係各位、並びに写真、メッセージ等を提供していただきました先生方、ＯＢ諸兄に厚く御礼申し上げます。

記念誌編集責任者

熊　谷　法　明

＜題字＞

岸田　理先生揮毫

発行日	昭和５８年１２月１１日
発行者	龍谷大学学友会学術文化局吹奏楽部・ＯＢ会
事務局	〒612 京都市伏見区深草塚本町 龍谷大学紫朋館内　吹奏楽部 電話　075（642）９８７２
発行責任者	轡田智文
編集責任者	熊谷法明